慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 金聖嘆本『水滸伝』の成立過程に関する試論 : 明代伝奇「元宵鬧」との関係について |
| Sub Title | A consideration of the formation process of Jin Shengtan's version of Shuihu zhuan : its relationship with the drama in the Ming Dynasty, Yuanxiaonao |
| Author | 石川, 就彦(Ishikawa, Narihiko) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 2022 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.122, (2022. 6) ,p.37 (208)- 57 (188) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01220001-0037 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 金聖嘆本『水滸伝』の成立過程に関する試論

## ――明代伝奇「元宵鬧」との関係について――

石川　就彦

### 一　序言

明代白話小説『水滸伝』では百八人の好漢が梁山泊に入山するまで、多くの話が数珠繋ぎになって展開される。その中でも、百回本及び百二十回本『水滸伝』第六〇～六七回で展開される盧俊義の入山に関わるストーリー（以下、盧俊義故事）は、梁山泊が招安に向かうための大きな契機であった。更に盧俊義故事は『水滸伝』のみならず、戯曲の題材にもなっている。盧俊義故事を題材とする戯曲としては、元末明初の成立とされる無名氏「梁山七虎鬧銅台」雑劇、明末清初の成立とされる李素甫「元宵鬧」伝奇が現存する。

明末清初の文人である金聖嘆は自らの批評理論に基づいて『水滸伝』を批評し、テキストを大幅に改変した。このテキストは一般的に「金聖嘆本」と呼ばれ、金聖嘆本のテキスト分析から彼の批評理論を論じる研究は多い。また、金聖嘆本の底本の解明も進んでおり、金聖嘆の『水滸伝』批評と先行版本の批評との関連性も度々論じられる。(1) しかし、他ジャンルの作品と金聖嘆本との影響関係については十分な研究がなされているとは言い難い。本稿では金聖嘆本『水滸伝』の成立過程に

おいて、「水滸伝」物語を題材とする戯曲が影響を及ぼした可能性についての考察を試みる。具体的には、成立年代が近いとされる李素甫「元宵鬧」との比較を通じて、金聖嘆本と「元宵鬧」の関係を分析する。

一般的に金聖嘆本の底本は百二十回本と考えられている。[2] 一方で、第四章で詳述するように、「元宵鬧」の執筆にあたっては、少なくとも百回本・百二十回本のどちらかは参照されたと考えられる。そのため本稿では百回本・百二十回本・「元宵鬧」・金聖嘆本の四種のテキストを比較し検討する。ただし紙幅の関係上、百回本のテキストに関しては、百二十回本と異同がある場合のみ括弧［］内に示す。また、回（折）数は括弧〈〉内に漢数字のみで表記する。

## 二　盧俊義故事の梗概

『水滸伝』における盧俊義故事の梗概は次の通りである。

梁山泊は大円法師を招いて晁蓋を追悼した。その際、法師が盧俊義の名を口にしたのをきっかけに、盧俊義の入山を画策する。占い師を装った呉用は李逵を引き連れて北京大名府に赴いて盧俊義の運勢を占い、近く災難が起こるが、東南（梁山泊のある方角）に千里行けば難を逃れられると告げる。また占いの結果を詩に詠んで盧俊義に聞かせ、壁に書きつけさせた。盧俊義は大番頭の李固、義子の燕青、妻の賈氏らの諫めを振り切って旅立つも、道中で梁山泊軍と交戦して捕らえられる。盧俊義は入山の誘いを拒否したが、その後もしばらく梁山泊に留まることとなった。呉用は先に下山する李固に対し、盧俊義が梁山泊の一員になったこと、以前壁に書いた詩の各句の冒頭を繋げると「蘆（盧）俊義反」となり、これは盧俊義の国に対する反逆の意図を表すことを告げた。屋敷に戻った李固は、かねてより不貞関係にあった賈氏と共謀して盧俊義を梁中書に告発し、告発に反対した燕青を追放した。しばらく経ち、何も知らずに帰宅した盧俊義は梁中書に捕らえられ投獄される。燕青が一度救出に成功するも、直後にまた捕らえられ、再度投獄された。燕青から事情を聞いた梁山泊は盧俊義の救出に向かうが失敗し、その際に石秀も捕縛、投獄される。その後、二度にわたって北京大名府を攻めようとしたが途中で断念し、救出は失敗に終わる。元宵節の賑わいに乗じて三度目の救出作戦を実行し、盧俊義と石秀を助け出した。その際、

李固と賈氏を捕らえ、梁山泊に帰還した。盧俊義は第二位の頭領となり、李固・賈氏は殺された。

「元宵鬧」においては、僧侶探しのための李逵の下山、燕青による李固の反骨の相の指摘、時遷の城内への潜入、燕青追放の経緯の詳細な描写、閻婆惜の物語に関わっていた張文遠の再登場、招安を受けての大団円など、登場人物や設定に違いが見られるが、『水滸伝』と概ね一致する。

## 三　反詩の問題

「元宵鬧」と金聖嘆本の関係を紐解く手掛かりとして、反詩の字句の問題がある。盧俊義故事内でこの反詩は、①盧俊義が壁に書きつけた際、②阮三兄弟が盧俊義を取り囲んだ際、③呉用が李固に対して（「元宵鬧」では李固が張文遠に対して）「蘆（盧）俊義反」の解き明かしをした際の三場面で描かれる。以下は①②③の字句を比較したものである。

【百回本・百二十回本】

①蘆花叢裏一扁舟　俊傑俄從此地遊　義士若能知此理　反躬逃難可無憂〈六一〉

②蘆花叢裏一扁舟　俊傑俄從此地遊　義士若能知此理　反躬逃難可無憂〈六一〉

③蘆花蕩裏一扁舟　俊傑那能此地遊　義士手提三尺劒　反時須斬逆臣頭〈六二〉

【元宵鬧】

①蘆花叢裡一扁舟　俊杰俄從此地游　義士若能知此理　反躬逃難可無憂〈四〉

②蘆花叢裡一扁舟　俊傑黄昏獨自游　義士若能知此理　返躬逃難必無游(4)〈七〉

③蘆花叢裡一扁舟　俊傑俄從此地游　義士若能知此理　反躬逃難可無憂〈一三〉

【金聖嘆本】

①蘆花灘上有扁舟　俊傑黄昏獨自遊　義到盡頭原是命　反躬逃難必無憂〈六〇〉

②蘆花灘上有扁舟　俊傑黄昏獨自遊　義到盡頭原是命　反躬逃難必無憂〈六〇〉
③蘆花灘上有扁舟　俊傑黄昏獨自遊　義士手提三尺劔　反時須斬逆臣頭〈六一〉

（①②：蘆の花が咲くほとりには小舟があり、俊傑が夕暮れに一人で訪れる。その義の心が絶頂に達することは元々定められた命運であり、我が身を顧みて難を逃れるならばきっと憂いはなくなるだろう。／③：（第一・二句訳文略）義士は三尺の剣を手に提げ、叛く時には必ずや逆臣の頭を斬ることだろう。）

【元宵鬧①・③】の字句は【百回本・百二十回本①・②】と完全に一致する。一方で【元宵鬧②】第二句中の「黄昏獨自」と第四句中の「必」は【金聖嘆本①・②】と一致する。以上の比較から、「元宵鬧」は百回本（または百二十回本）と金聖嘆本の両方のテキストを含むことが分かる。「元宵鬧」が『水滸伝』刊行後に制作されたことを踏まえれば、[5] ここで二つの可能性が浮上する。ひとつは李素甫が百回本（または百二十回本）と金聖嘆本の両者を参照し、それぞれの字句を借用した可能性であり、もうひとつは李素甫が百回本（または百二十回本）を底本とし、金聖嘆が「元宵鬧」の字句を借用しつつ百二十回本に手を加えた可能性である。この二つの可能性については、次章で詳しく検討する。

小説技巧という観点で考えると、①～③の字句が一致する方が反詩の伏線としての機能が発揮される。その点では「元宵鬧」においては反詩の効果が半減していると言える。「元宵鬧」の底本がどの版本であれ、『水滸伝』では前後一致していた反詩の字句をあえて一致しないように改変した理由は考察しがたい。「元宵鬧」自体の未熟さに帰結することもできようが、テキストが伝わる過程で②の字句のみが書き換えられた可能性も否定できない。

尚、【百回本・百二十回本③】・【金聖嘆本③】の後半二句が【百回本・百二十回本①・②】・【金聖嘆本①・②】と異なる点については、作者が故意に行ったものと思われる。『水滸伝』の③は呉用が李固に口頭で説明する場面であるため、①・②と齟齬をきたしても許容されるが、【元宵鬧③】では李固が反詩の書かれた壁を直接見ながら解説しているために、字句の異同は許されなかった。③の字句については、元末明初・無名氏「梁山七虎鬧銅台」雑劇に見える反詩「蘆花蕩内一扁舟

俊義身危可去遊　若肯山中尋保義　**那時方斬逆賊頭**(6)（蘆の花が咲く湖には一艘の小舟が浮いており、俊義は身の危険を冒して訪れることだろう。もし進んで山中で保義を尋ねたならば、その時はじめて逆賊の頭を斬ることだろう）」〈二〉の第四句「那時方斬逆賊頭」が後に『水滸伝』に取り込まれ、「反時須斬逆臣頭」に改変されたとされる。(7) また、【百回本・百二十回本③】第一句中の「蕩」も「梁山七虎鬧銅台」以来、百二十回本まで継承されてきたものであろう。

## 四　「元宵鬧」の底本

### 四―一　成立時期からの考察

「元宵鬧」の底本を調査するにあたって、まず「元宵鬧」の成立時期から考察を試みる。

「元宵鬧」の作者については李素甫説と朱良卿（朱佐朝）説がある。清・無名氏『伝奇彙考標目』の李素甫の項目には「元宵鬧　一云：『朱良卿作。』」とあり、(8) 朱良卿（朱佐朝）の項目にも「元宵鬧」の名が見える。(9)『伝奇彙考標目』には「別本」（邵氏増補原稿本）を用いた校勘記があり、朱良卿の項目には「元宵鬧……。方蓮英事、與李本異」、(10) 李素甫の項目には「元宵鬧　宋江事」(11) との注がある。このことから、李素甫の「元宵鬧」とは別に朱良卿の「元宵鬧」も存在していた可能性がある。一般的には、傅惜華氏が高奕『伝奇品』・黄文暘『曲海目』・支豊宜『曲目表』各書の朱良卿の作品目録に「元宵鬧」の名が見えないことから李素甫の作品だと見做したように、(12) 李素甫を現存する「元宵鬧」の作者とする説が有力であり、本稿でも李素甫説に従う。「元宵鬧」の作者の問題をはじめ、「元宵鬧」に関する総合的な研究としては、聶芸「明代水滸戯《元宵鬧》研究」（修士論文、河北師範大学、二〇一六年）が詳しく、特に第五章第一節は聶氏論文に拠ったところが大きい。

李素甫の生卒年や「元宵鬧」の成立年代について、歴代の戯曲集では情報が錯綜する。『伝奇彙考標目』では李素甫を明代の人物とするが、邵氏の「別本」では清代の人物として収録する。(13) また、『重訂曲海総目』・『曲海総目提要』・『今楽考証』は「元宵鬧」（あるいは別名の「玉麒麟」）を清代無名氏の作として収録する。(14) 鄭振鐸氏は李素甫を阮大鋮に代表される明・

天啓年間（一六二一－一六二七）から清・康熙年間（一六六二－一七二二）前半までの劇作家の一人として扱い[15]、『中国曲学大辞典』では「明崇禎初在世」とし[16]、許子漢氏は天啓・崇禎年間（一六二八－一六四四）から清初の作家と見做す[17]など、いずれも具体的な生卒年や成立年代の確定には至っていない。管見の限り、程華平『明清伝奇雑劇編年史』だけは李素甫を「約崇禎初年在世」とし、崇禎五（一六三二）年の項に入れる。しかし、崇禎五年の項に入れる根拠が示されない上に、凡例に「年之不能定而僅知大体時段者、則在相応的朝代予以交代（年が確定できず大体の年代だけ判明しているものは、それに相当する時代で解説する[18]）」とあることから、これはあくまで推測によるものに過ぎないだろう。以上の点から、「元宵鬧」の成立年代は早くて天啓年間、遅くとも清初であると考えられているということになる。

一方で『水滸伝』諸版本の刊行時期も確定には至っていない。文繁本としては現存最古の完本である容与堂本（百回本）の版本のうち、内閣文庫所蔵本の序には万暦三十八（一六一〇）年の日付があり、これが容与堂本の刊行年であると考えられている。百二十回本は特に多くの版本が存在するが、その中でも古い「全伝本」に崇禎元（一六二八）年から施行された避諱が使用されていることから、崇禎元年以降の刊行と考えられる。金聖嘆本の刊行年間については、「序三」に「皇帝崇禎十四年二月十五日」とあり、泰昌（一六二〇）・天啓・崇禎年間の避諱が厳格に施されている点から、少なくとも版下は崇禎年間に作られたとされる[19]。

以上の情報から、金聖嘆本と「元宵鬧」の成立年代は近いということは言えるが、両者の前後関係の断定は難しい。そのため続いてはテキスト比較を通して「元宵鬧」の底本を探る。

### 四―二　テキスト比較からの考察

『水滸伝』と「元宵鬧」のテキスト比較からは、「元宵鬧」の底本に関する手掛かりを得ることができる。まず、盧俊義が梁山泊のそばを通る際に掲げた旗に書かれた詩の字句を例に挙げる。

【百回本・百二十回本】

慷慨北京盧俊義　**遠駄貨物離鄉地**　**一心只要捉強人**　**那時方表男兒志**〈六一〉

【元宵鬧】

慷慨北京盧俊義　**遠駝貨物離鄉地**　**一心只要捉強人**　**那時方表男兒志**〈七〉

【金聖嘆本】

慷慨北京盧俊義　**金裝玉匝來深地**　**太平車子不空回**　**收取此山奇貨去**〈六〇〉

（意気盛んな北京の盧俊義が、黄金や玉を身に着け奥地にやって来た。太平車をただで引き返すつもりはなく、この山の奇貨を手に入れて帰るつもりだ。）

「元宵鬧」のこの詩は明らかに百回本（または百二十回本）に基づいており、金聖嘆本の字句を参照した形跡は認められない。ここに金聖嘆は「奇貨字、又用得妙（「奇貨」の字はまた用い方が素晴らしい）」という夾批を附し、梁山泊好漢を「奇貨」に喩えた点に注目する。この箇所の異同を見る限りでは、「奇貨」という表現は金聖嘆本独自のものかとも思えるが、「元宵鬧」に「把命訣爲奇貨、首做梁山叛逆徒（（盧俊義は）命を絶って奇貨となり、その首は梁山泊の逆徒となった）」〈一五〉という燕青のセリフがあることから、梁山泊好漢を「奇貨」に喩えた「元宵鬧」の表現を金聖嘆が借用したとも推測される。

続いて、晁蓋の追悼の際に大円法師が盧俊義の名を口にした場面の一節を示す。

【百二十回本［百回本］】

宋江呉用聽了、猛然省起説道、「你看我們未老、却恁地忘事。北京城裏［裡］是有箇［個］盧大員外、雙名俊義、綽號玉麒麟、是河北三絶、祖居北京人氏、一身好武藝、棍棒天下無對。梁山泊寨中若得此人時、**何怕官軍緝捕、豈愁兵馬來**

臨。」〈六〇〉

【元宵鬧】

（外（筆者注：宋江））軍師、我久聞河北有個盧員外、雙名俊義、綽號玉麒麟。膂力過人、熟嫻弓馬、文武俱全、萬夫莫敵。我寨中若得此人上山、**何愁官軍緝捕**。〈三〉

【金聖嘆本】

宋江聽了、猛然省起説道、「你看我們未老、却恁地忘事。北京城裏是有箇盧大員外、雙名俊義、綽號玉麒麟、是河北三絶、祖居北京人氏、一身好武藝、棍棒天下無對。梁山泊寨中若得此人時、**小可心上還有甚麼煩惱不釋**。」〈五九〉

（宋江は聞いて突如思い出して言った、「ご覧の通り我々はまだ老いたわけでもないのに、どうして忘れていたのでしょう。北京城には盧員外という者がおり、名は二字で俊義、渾名は玉麒麟、河北三絶の一人で、代々北京に住み、武芸に優れ、棍棒は天下無双です。梁山泊の山寨がもしこの人物を得たならば、私の心には何の心配事もなくなります。」）

「元宵鬧」の「何愁官軍緝捕（どうして官軍の追捕を心配することがあろうか）」は百回本（または百二十回本）の「何怕官軍緝捕、豈愁兵馬來臨（どうして官軍の追捕を恐れ、軍隊の侵攻を心配することがあろうか）」の字句を削ったものである可能性が高い。

次の例も、「元宵鬧」のテキストが百回本・百二十回本に近いことを示す。

【百二十回本［百回本］】

呉用再把鐵算子搭了一回、便回員外道、「只［則］除非去東南方巽地上一千里之外、**方可**免此大難、雖有些驚恐、却不傷大體。」〈六一〉

【元宵鬧】

（末（呉用））…（略）…員外、幸虧天恩解厄。除往巽方千里之外、**方可**免此大難。〈四〉

【金聖嘆本】

呉用再把鐵算子搭了一回、沉吟自語道、「只除非去東南方巽地上一千里之外、**可以**免此大難、然亦還有驚恐、却不得傷大體。」〈六〇〉

（呉用は鉄の算木でもう一度占い、考えながら呟いた、「東南の方角、巽に千里以上行けば、この大難を免れましょう。しからば恐ろしい目に遭おうとも、そのお体が傷付くことはないでしょう。」）

以上のことから、百回本（または百二十回本）が「元宵鬧」の底本である可能性が非常に高いと言えよう。またそう考えれば、反詩の例から、金聖嘆本の成立過程において「元宵鬧」が参照された可能性も高まる。

## 五　盧俊義・燕青形象

### 五―一　「元宵鬧」における盧俊義・燕青形象

聶氏は百回本・「元宵鬧」間における盧俊義・賈氏・燕青・蔡福の形象の変化について論じており、総じて「元宵鬧」の人物形象は二極化していると述べる。[20] 盧俊義形象は「頑固で自信家な大地主」から「報国の志士」に、賈氏形象は「愛情を得られないことを恨みに思う婦人」から「淫蕩な婦人」に、燕青形象は「利発な義子」から「忠実な召使い」に、蔡福形象は「貪欲な押獄」から「善良な押獄」に変化しており、盧俊義・燕青・蔡福は「忠」や「善」といった中国の伝統的な倫理的審美観念に合う形象が意識され、賈氏は情欲に溺れる反倫理的な姿が強調されると指摘する。[21] 本節では本章第二・三節の議論と関わる「元宵鬧」における盧俊義・燕青形象について、聶氏の分析を中心に述べる。

まず盧俊義形象について、『水滸伝』で描かれる盧俊義には自尊心の強い大地主らしさが表れるとされる。[22] 一方で「元宵鬧」の盧俊義について聶氏は、盧俊義が報国の思いを述べたり、宋江の籠絡に対して「礼義」・「盗泉之水」・「滔天大逆」・

「志實不頽」といった語を用いて拒絶したりすることなどから、「元宵鬧」の盧俊義は国に対する「忠」が強調される傾向にあると述べる。更に愛国志士という盧俊義形象には国家危急の明末に生きた作者自身の姿が投影されたと指摘する。

『水滸伝』の燕青形象については主に忠心の篤さと賢明さ、あるいは多芸さに注目されることが多い。[23]『大宋宣和遺事』や元雑劇以降の燕青形象の変遷に関する研究もあるが、[24]「元宵鬧」の燕青を詳細に解析したものは管見の限り聶氏論文のみである。

聶氏は「元宵鬧」の燕青について、盧俊義が旅立つ際に同行を求める、盧俊義の帰還を路上で待つといった『水滸伝』と同様の行動を取るだけでなく、李固に反骨の相があると直諫するなど、忠心溢れる燕青像が描かれると述べる。また、梁山泊軍と交戦中の盧俊義が燕青に助けを求めているという李固の嘘を信じて助けに向かう描写には、『水滸伝』に見られるような鋭い洞察力や判断力はないものの、常に主人を思う「忠僕」としての姿が描かれると指摘する。以上のことから聶氏は、「元宵鬧」の燕青は主人に対する「忠」が強調されるとする。

### 五―二　金聖嘆本における盧俊義形象

盧俊義の国に対する「忠」の強調、燕青の主人に対する「忠」の強調という傾向は、「元宵鬧」だけに見られるものではない。まず金聖嘆が盧俊義像をどう捉えていたのかについては、金聖嘆本第六〇回回初総評から読み解くことができる。

> 寫盧員外別呉用後、作書空咄咄之狀、此正白絹旗、熟麻索之一片雄心、渾身絶藝、無可出脱、而忽然受算命先生之所感觸、因擬一試之於梁山。而又自以鴻鵠之志未可謀之燕雀、不得已望空咄咄、以自決其心也。寫英雄員外、正應作如此筆墨、方有氣勢。俗本乃改作誤聽呉用、寸心如割等語、一何醜惡至此。〈六〇総評〉

（盧員外が呉用と別れたのちに憂い嘆く様子を描く。これはまさに白絹の旗（に書かれた詩）や（好漢を捕らえるために用意した）麻の縄に表れる一片の「雄心」、全身に漲る卓絶した技芸を有するが、それを発揮できずにいたためであ

る。しかし突然占い師に触発されたために、梁山泊でこれを試そうとしたのである。また自ら「鴻鵠の志」は燕雀と謀ることはできないとして、天を仰いで嘆き、自ら決心したのである。「英雄員外」を描くに、まさにこのような筆致であり、力が漲っている。俗本はなんと盧員外が誤って呉用に従うように改変しており、「寸心如割」などという言葉は、なんともこれほどまでに醜いことよ。）

この一段で金聖嘆は、盧俊義は「雄心」や「鴻鵠の志」を遂げられないことを嘆いており（「書空咄咄」）、梁山泊に向かったのは呉用の占いの結果に従ったのではなく、盧俊義が主体的に決めたことだと強調する。「雄心」・「鴻鵠の志」が指すものについては、のちの盧俊義自身の「把這賊首解上京師、請功受賞、方表我平生之志（この賊の首領を都に連行し、褒美を賜ってはじめて、私のかねてよりの志を遂げられるのだ）」〈六〇〉というセリフに表れている。

この総評のように、金聖嘆が盧俊義を「英雄員外」と評した例は六例ある。尚、「元宵鬧」との文言の比較が可能な場合に限り、「元宵鬧」と百回本の原文も示す。

【百二十回本】

盧俊義答禮道、「不才無識無能、誤犯虎威、萬死尚輕、何故相戲。」〈六二〉

【金聖嘆本】

盧俊義大笑道、「盧某昔日在家實無死法、盧某今日到此並無生望。要殺便殺、何得相戲。」〈六一〉

（盧俊義は大笑いして言った、「私も以前のように家におりましたなら、何も死ぬわけはないのですが、今日ここに来た以上、生きる望みは全くありません。殺すなら殺せばすむのに、どうしてからかったりするのですか。」）

【百回本・百二十回本】

盧俊義回説、「寧就死亡、實難從命。」〈六二〉

【元宵鬧】

（生（盧俊義））咳。我頭可斷、志實不頽、決難從命。〈八〉

【金聖嘆本】

盧俊義道、「住口。盧某要死極易、要從實難。」〈六一〉

（盧俊義は言った、「いいなさんな。私は死ぬことなど何とも思いませんが、おすすめに従うわけにはいきません。」）

【百二十回本［百回本］】

盧俊義道、「小可在此不妨。只恐家中老小、不知［家中、知道］這般的消息。」〈六二〉

【元宵鬧】

（生）我在此不妨、只是家中懸望、將何以慰。〈八〉

【金聖嘆本】

盧俊義道、「頭領既留盧某不住、何不便放下山。實恐家中老小、不知這般消息。」〈六一〉

（盧俊義は言った、「私を引き留めないなら、どうして下山させてはくださらないのですか。家の者たちがこんなこととは知らずに心配しておりましょう。」）

【百二十回本［百回本］】

盧俊義分付李固道、「我的苦、你都知了。你回家中、説與［分付］娘子不要憂心。我過三五日便回也。」〈六二〉

【元宵鬧】

（生）李固過來。你先回去。我只在旬日後、便歸。家中事體、仍舊管理、不得有誤。〈八〉

【金聖嘆本】

盧俊義分付李固道、「我的苦、你都知了。你回家中、説與娘子不要憂心。我若不死、可以回來。」〈六一〉

（盧俊義は李固に言い付けた、「私の難儀は、おまえも知っての通りだ。家に戻ったら妻に心配するなと伝えてくれ。死ななければ、帰れるだろう。」）

【百二十回本】

盧俊義説道、「感承衆頭領好意相留、只是小可度日如年。今日告辭。」〈六二〉

【金聖嘆本】

盧俊義説道、「感承衆頭領不殺、但盧某殺了倒好罷休、不殺便是度日如年。今日告辭。」〈六一〉

（盧俊義が言った、「頭領の皆さんが私を殺さないでくれたことは感謝します。しかし私は殺してくれた方がいっそのことさっぱりできたでしょうが、殺してくれないので一日が一年のように長く感じられます。本日お暇いたします。」）

【百二十回本】

盧俊義推道、「非是盧某説口、金帛錢財、家中頗有、但得到北京盤纏足矣、賜與之物、決不敢受。」〈六二〉

【金聖嘆本】

盧俊義笑道、「山寨之物、從何而來、盧某好受。若無盤纏、如何回去、盧某好却。但得度到北京、其餘也是無用。」〈六一〉

（盧俊義は笑って言った、「山寨の物はどこから来たものですか。私は受け取りかねます。もし路銀がなく、どのように帰ることになりましょうとも、私はお断りします。北京大名府に到着できさえすれば、それ以上は必要ありません。」）

金聖嘆本の盧俊義の口調は百二十回本に比べて激しく厳しい。「英雄員外」との評語が出現する箇所全てで改変が見られることは注目に値する。これらの場面には「數語畫出一位英雄員外（この数語は英雄員外を描き出す）」、「到底是英雄員外語（まったくもって英雄員外の言葉である）」、「英雄員外到底不作軟語（英雄員外は軟弱な言葉をまったくもって発することがない）」といった夾批が繰り返し見られる。これらはいずれも宋江からの入山の誘いを拒否する盧俊義のセリフである。金聖嘆が称揚するのは、一貫して勧誘を突っ撥ねる毅然とした態度、強固な意志に裏打ちされた力強い言葉である。また、最後の例には「數語寫得進以禮、退以義。綽綽有餘、眞乃英雄員外（この数語には盧俊義が礼と義でもって出処進退を決する姿を描く。余裕のあるさまは、まことに英雄員外である）」という夾批が附せられ、たとえ梁山泊相手であっても礼や義を忘れず、金銭的のみならず精神的にも余裕がある盧俊義を「英雄」だと称賛する。

その他、「英雄員外」は見えないが、次のような改変例もある。

【百回本・百二十回本】

盧俊義答道、「頭領差矣。小可身無罪累、頗有些少家私。生爲大宋人、死爲大宋鬼。寧死實難聽從。」呉用幷衆頭領一箇箇説、盧俊義越不肯落草。〈六二〉

【元宵鬧】

（生）念俊義雖係鄙夫、粗知禮義。其盜泉之水、尚潔不飲、焉肯就此滔天大逆、以玷終身、惟義士諒之。〈八〉

【金聖嘆本】

盧俊義道、「咄。頭領差矣。盧某一身無罪、薄有家私。生爲大宋人、死爲大宋鬼。若不提起忠義兩字、今日還胡亂飲此一杯。若是説起忠義來時、盧某頭頸熱血可以便濺此處。」〈六一〉

（盧俊義は言った、「なんと、頭領それは違います。私は罪を犯したこともなく、家にはいくらか財産もあります。生き

ては大宋の人となり、死しては大宋の鬼となるのが私の願いです。もし「忠義」の二字を持ち出さないのでしたら、今日はお酒を頂戴しますが、忠義のことが話題になるのでしたら、私の首の熱い血をこの場に流しましょう。」）

この盧俊義のセリフには、梁山泊頭領である宋江が国家への忠義を語ることに対する明確な嫌悪感が表れる。ここには「只一字、便令談忠説義人驚心奪魄（ただこの一字（＝咄）は、すぐに忠義を語る人を縮み上がらせる）」、「宋江開口説忠義、員外却接口説差矣、妙絶（宋江は口を開いて「忠義」と言い、員外が続けて「差矣」と言うのは、素晴らしい）」という評語が見える。金聖嘆が宋江の偽善的・欺瞞的態度に極めて批判的であることはかねてより指摘されることであり、[25] 盗賊の首領である宋江が忠義を語ることに対する盧俊義の激しい反感はまさに金聖嘆の気持ちを代弁したものであると言えよう。盧俊義が好漢たちの処刑の夢を見るという金聖嘆本の結末も、金聖嘆の代弁者としての役割を与えられた結果なのかもしれない。この一連の場面に見られる盧俊義の「忠」の強調は、忠義を語る宋江像への否定的な評価と表裏の関係にある。そして梁山泊への入山に対する強烈な拒絶反応、国家への「忠」を重んじる盧俊義像は「元宵鬧」の傾向と一致する。

### 五―三　金聖嘆本における燕青形象

金聖嘆は盧俊義に対する燕青の「忠」に度々言及し、それを評価する。[26] 金聖嘆が燕青の泣き描写に手を加え、彼の「忠」を強調した点については、拙稿「金聖嘆本『水滸伝』の泣き描写と批評」（『慶應義塾中国文学会報』第四号、二〇二〇年三月）で詳しく論じたが、本稿では盧俊義が災厄を逃れるために家を出発する場面を示す。

【百二十回本】

分付娘子、「好生看家。多便三箇月、少只四五十日便回。」賈氏道、「丈夫路上小心、頻寄書信回來。」説罷、**燕青在面前拜了**。〈六一〉

【金聖嘆本】

分付娘子、「好生看家。多便三箇月、少只四五十日便回。」賈氏道、「丈夫路上小心、頻寄書信回來。」説罷、**燕青流淚拜別**。〈六〇〉

（「家のことは頼む。長くて三月、早ければ四、五十日で戻る」と妻に言いつけた。賈氏は言った、「あなた、道中お気をつけください。手紙を何度もお寄せください。」言い終わると、燕青は涙を流して別れの挨拶をした。）

百二十回本ではただ拝礼して盧俊義を見送る燕青だが、金聖嘆本では涙を流す。この場面に「寫娘子昨日流淚、今日不流淚也、却恐不甚明顯、又特地緊接燕青流淚、以形擊之（賈氏は昨日涙を流し、今日は涙を流さないが、これはおそらくあまり明確になってはいない。そのためわざわざ続けて燕青に涙を流させて、それでもって賈氏を攻撃しているのだ）」という夾批がある。「寫娘子昨日流淚」というのは、盧俊義に先立って出発した李固を見送りながら賈氏が泣いたことを指す。金聖嘆は燕青を泣かせることで、李固に対しては泣き、盧俊義に対しては泣かない賈氏の不貞さを際立たせたと同時に、燕青の盧俊義を心配する気持ち、つまり主人への「忠」を強調した。このような燕青の「忠」の強調を意図した改変は散見され、これは先述の如く「元宵鬧」と共通する傾向である。尚、賈氏の不貞さの強調も「元宵鬧」の賈氏形象の特徴と共通するが、この他に賈氏の不貞さの強調を意図した金聖嘆の改変はほぼ見られない。(21)

「元宵鬧」の燕青形象との共通性が見出だせる他の例として、盧家を追放された燕青が盧俊義と路上で再会する場面がある。燕青の追放後の経緯について、金聖嘆本第六一回回初総評に「讀俗本至小乙求乞、不勝筆墨疏略之疑。竊謂以彼其人、即何至無術自資、乃萬不得已而且出於求乞。既讀古本、而始流淚歎息也（俗本を読むと燕青が乞食になるに至るまで、筆致が粗略であるという疑念に堪えない。思うにその人は、どうして自ら稼ぐ術がなくなり、やむを得ず乞食をすることになったのか。古本を読むと、涙が流れて溜息が出始める）」とあり、金聖嘆が「俗本」つまり百二十回本の燕青が乞食をするに至るまでの記述の粗略さに不満であったことが窺える。実際に百二十回本と金聖嘆本とを比較すると改変が見られる。

【百二十回本】

他已和娘子做了一路、嗔怪燕青違拗、**將我趕逐出門。將一應衣服盡行奪了、趕出城外**。更兼分付一應親戚相識、但有人安着燕青在家歇的、他便捨半箇家私和他打官司。因此、無人敢着小乙。在城中安不得身、只得來城外求乞度日、**權在菴内安身。正要往梁山泊尋覓主人、又不敢造次**。〈六二〉

【金聖嘆本】

他已和娘子做了一路、嗔怪燕青違拗、**將一房家私、盡行封了、趕出城外**。更兼分付一應親戚相識、但有人歇的、他便捨半箇家私和他打官司。因此、小乙城中安不得身、只得來城外求乞度日。**小乙非是飛不得別處去、只爲深知主人必不落草、故此忍這殘喘、在這里候見主人一面**。〈六一〉

（あいつ（＝李固）はもう奥様と夫婦気取りで、私が言うことを聞かないのに腹を立て、私の持物を残らず取り上げて、私を城外に追放しました。そのうえ親類や知人たちに、私を家に引き入れて泊める者は、たとえ財産の半分を使っても訴えると触れ回ったので、私は城内には身を落ち着ける場所もなく、仕方なく城外で乞食をして暮らしていました。私はよその土地に高飛びできないわけではありませんが、ご主人が決して落草などしないことをよく分かっておりますので、なんとか命をながらえ、一目お会いできるようにここでお待ち申し上げておりました。）

両版本の燕青はいずれも城外に追放され、物乞いをして過ごしたが、その場に留まっていた理由は異なる。百二十回本の燕青が盧俊義を探しに梁山泊に向かうのを躊躇し、致し方なくその場に留まっていた一方で、金聖嘆本の燕青は盧俊義が落草するはずないと信じて、敢えて盧俊義が通るはずのこの場所に留まって主人を待っていた。つまり、盧俊義に会うために積極的にその場に留まっていたのである。この改変で、主人を信じ抜く燕青の「忠」の篤さと彼の主体性が強調される。

「元宵鬧」では燕青追放の経緯が大幅に増大して描かれている。燕青は女中の春英から李固と賈氏の姦通の事実を聞いて

賈氏を問い質すが、賈氏は怒って燕青に「官休（盧俊義と共に告発されて死罪となる）」か「私休（身ひとつで家から追放される）」のどちらかを選ぶよう脅迫する。仕方なく燕青は「私休」を選び、家から追放される。賈氏は春英に命じて燕青を家に匿わないよう触れ回る。この時点で燕青は盧俊義に道で会えたら泣いて訴えようと決心する〈十二〉。その後燕青は昼には野鳥を狩り、夜には古廟で過ごしていた。その場所は梁山泊へ続く道だったので、もし盧俊義に会えたら、盧俊義が賈氏らの毒手に遭わないように訴えるつもりでいた。するとそこに盧俊義が通りかかる〈十五〉。ここの経緯から、燕青は盧俊義に会うために梁山泊に繋がるこの場所に主体的に留まっていたことが分かる。この点は金聖嘆本と共通する。

「元宵鬧」と同様に盧俊義と燕青の入山の物語を題材とした「梁山七虎鬧銅台」雑劇では、燕青が追放され乞食をして過ごす経緯は描かれない。現存する水滸戯でこの経緯を描くものが「元宵鬧」のみであること、金聖嘆が燕青追放後の経緯及び彼の「忠」の精神に注目していたこと、そして反詩の字句異同の状況などから考えるに、燕青形象や燕青追放後の経緯に関して、「元宵鬧」が金聖嘆本に影響を与えた可能性は十分にある。

## 六　結語

本稿では盧俊義故事に見える反詩の字句異同の問題を端緒として、「元宵鬧」と金聖嘆本との関係性について検討した。成立年代から両者の関係性を証明することは難しいが、本文異同から、「元宵鬧」が基づいた版本は百回本あるいは百二十回本であり、金聖嘆は「元宵鬧」を参照し、「元宵鬧」の表現を借用したという可能性が高いと考えられる。また、盧俊義・燕青の人物形象にも両者に共通する傾向があるのみならず、百回本や百二十回本には詳細には描かれず、「元宵鬧」にのみ描写される燕青追放の経緯について金聖嘆自身が評語で言及した点などからも、金聖嘆本が「元宵鬧」の影響を受けたことは十分に考えられる。[28] このことは金聖嘆本成立過程の解明において重要な意味を持つ。金聖嘆が「元宵鬧」を参照し、『水滸伝』批評に反映させたならば、盧俊義故事に限らず、その他の内容においても戯曲と批評との関連性を探る価値はあると言えよう。

## 注

(1) 竹下咲子「金聖歎批評の源流を探る――百二十回本『水滸傳』李卓吾批評を中心に――」（『和漢語文研究』第七号、二〇〇九年十一月）など参照。

(2) 小松謙『水滸傳と金瓶梅の研究』（汲古書院、二〇二〇年）二八－三六・二四八頁など参照。

(3) 本稿で用いるテキストは以下の通りである。【百回本】：『明容与堂刻水滸伝』（上海人民出版社、一九七五年）。【百二十回本】：宮内庁書陵部所蔵本（「徳山毛利本」）。【金聖嘆本】：『第五才子書施耐庵水滸伝』（中華書局、一九七五年）。【元宵鬧】：古本戯曲叢刊編輯委員会『古本戯曲叢刊 二集』（国家図書館出版社、二〇一六年）。傅惜華氏によれば、『古本戯曲叢刊』所収の「元宵鬧」は、唯一現存する清・雍正年間の抄本を書き写したものであるとし（傅惜華『水滸戯曲集 第二集』（上海古籍出版社、一九八五年）「題記」（八－九頁）参照）、程華平氏によれば、『古本戯曲叢刊』は許之衡飲流斎鈔校本を影印したものであるとする（程華平『明清伝奇雑劇編年史』（上海人民出版社、二〇二〇年）八六四頁参照）。尚、複数版本の原文を並べて引用する際には金聖嘆本の和訳のみ示す。金聖嘆本の和訳は佐藤一郎訳『世界文学全集 水滸伝』（集英社、一九七九年）に基づき、適宜筆者が改めた。その他の和訳は拙訳による。

(4) 注(3)傅氏前掲書では「反躬逃難必無憂」に作る（三一八頁参照）。本書所収の「元宵鬧」は許之衡飲流斎鈔校本に校訂を加えたものである（「題記」（八－九頁）参照）。

(5) 小松謙『中國白話文學研究――演劇と小説の關わりから――』（汲古書院、二〇一六年）二〇六頁、鶴田茜「南曲『元宵鬧傳奇』と『水滸傳』」（九州大学中国文学会『中国文学論集』第五〇号、二〇二一年十二月）一六七－一六八頁参照。

(6) 傅惜華など編『水滸戯曲集 第一集』（上海古籍出版社、一九八五年）一四九頁参照。

(7) 盛巽昌補証『水滸伝補証本 下〔増訂本〕』（上海書店出版社、二〇一九年）五五〇頁参照。

(8) 中国戯曲研究院『中国古典戯曲論著集成 第七集』（中国戯劇出版社、一九五九年）二二七頁参照。

(9) 注(8)前掲書二二二頁参照。

(10) 注(8)前掲書二七八頁参照。

(11) 注(8)前掲書二八二頁参照。

(12) 注(3)傅氏前掲書「題記」（八－九頁）参照。

(14) (13) 注(8)前掲書二二七頁・二八二頁参照。

(15) 清・黄文暘原編／無名氏重訂／管庭芬校録『重訂曲海総目』（注(8)前掲書所収）三六五頁、清・無名氏『曲海総目提要』（俞為民・孫蓉蓉編『歴代曲話彙編 新編中国古典戯曲論著集成 清代編 曲海総目提要（下）』（黄山書社、二〇〇九年）所収）一一八七－一一八九頁、清・姚燮『今楽考証』（中国戯曲研究院『中国古典戯曲論著集成 第十集』（中国戯劇出版社、一九五九年）所収）三一二頁参照。

(16) 鄭振鐸『插図本中国文学史 四』（人民文学出版社、一九八二年）一〇〇四－一〇〇五頁参照。

(17) 斉森華・陳多・葉長海主編『中国曲学大辞典』（浙江教育出版社、一九九七年）一四七頁参照。

(18) 許子漢『明伝奇排場三要素発展歴程之研究』（国立台湾大学出版委員会、一九九九年）六四三頁参照。

(19) 注(3)程氏前掲書「凡例」（一－二頁）・八六四頁参照。

(20) 笠井直美「北京大學圖書館藏『忠義水滸全傳』――「萬曆袁無涯原刊」情報の一人歩き」（『名古屋大学中国語学文学論集』第二一輯、二〇〇九年十二月）六－七頁、注(2)小松氏前掲書二二－二九・二四六－二四七頁参照。

(21) 本節の内容は主に聶芸「明代水滸戯《元宵鬧》研究」（修士論文、河北師範大学、二〇一六年）一五－二六頁に拠る。以下、一々は注記しない。

(22) 賈氏の不貞さの強調を指摘する先行研究は他にもある。涂秀虹『元明小説戯曲関係研究』（上海三聯書店、二〇〇四年）一四二頁、張俊卿「浅談明代文人伝奇中四部水滸戯的両性関係」（『安徽文学』二〇〇七年第一一期）三頁など参照。また李林策氏・劉天振氏は、賈氏・李固・張文遠の不義という「輔線（副次的内容）」が、盧俊義や梁山泊の行動の合理性や彼らの忠義を際立たせる役割を果たすとする（李林策・劉天振「明伝奇改編《水滸伝》述論」（『浙江芸術職業学院学報』第一七巻第四期、二〇一九年十一月）一二頁参照）。

(23) 例えば呉小如氏は、梁山泊を恐れる李固を叱責する描写は、盧俊義が自分自身の力量を過大評価し、忠告を聞き入れない様子を描き出すと同時に、彼の地主階級としての顔が露呈すると述べる（呉小如「論水滸人物盧俊義」（『社会科学戦線』一九七九年四期）二五二－二五三頁参照）。

例えば曲家源氏は、『水滸伝』の燕青の特徴は盧俊義に対する「奴性（奴隷的性質）」と、盧俊義救出や徽宗とのやり取りなどに見られる「機伶乖覚（利発さ）」にあるとする（曲家源『水滸伝新論』（中国和平出版社、一九九五年）二一九－二三〇頁参照）。

その他、李輝「《水滸伝》中燕青人物形象解析」（『湖南函授大学学報』第二四巻第五期、二〇一一年五月）、顧瑞雪「燕青，水滸

(24) 英雄的另一類人生――兼論《水滸伝》作者対水滸英雄出路的思考」（『安徽文学』二〇〇九年第九期）、王麗頻「梁山好漢中的另類英雄――探析《水滸伝》中燕青的形象」（『湖南大衆伝媒職業技術学院学報』第一七巻第六期、二〇一七年十一月）など参照。

(25) 川浩二「「浪子」燕青と高俅――〈水滸傳〉人物論の一視點として――」（早稲田大学中国文学会『中国文学研究』第二五期、一九九九年十二月）、宋子俊「元雑劇中的宋江和燕青形象考述――兼論《水滸伝》与水滸戯人物描写的演変、発展関係」（『甘粛社会科学』二〇〇〇年第二期）、陳松柏「燕青形象的嬗変」（『明清小説研究』総第七五期、二〇〇五年第一期）、鄧暁東「従燕青形象之演変看《水滸伝》作者的矛盾心態」（『重慶郵電学院学報（社会科学版）』二〇〇五年第二期）など参照。

(26) 中鉢雅量『中国小説史研究――水滸伝を中心として――』（汲古書院、一九九六年）二三二－二三九頁、注(2)小松氏前掲書二六〇頁など参照。

(27) 例えば、第六〇回回初総評には「風流者篤其忠貞（風流な者（＝燕青）は忠貞が篤い）」とある。

(28) その他、金聖嘆本では盧俊義が帰宅した際の李固と賈氏のセリフが統一され、二人の関係性が強調される。この改変については拙稿「金聖嘆本『水滸傳』の會話場面――臨場感の追求と發話文の呼應を例に――」（『日本中国学会報』第七三集、二〇二一年十月）を参照されたい。

「元宵鬧」のテキストが伝わる過程で字句が改変された可能性について本稿第三章で触れたが、注(5)鶴田氏前掲論文においても、「元宵鬧」の後半部が後世の読書人によって加筆修正された可能性について言及されている。本稿で挙げた反詩の例において、後人が金聖嘆本を参照して改変した結果、【元宵鬧②】にのみ金聖嘆本の字句が用いられたという可能性は否めない。これを解明するには「元宵鬧」諸版本の字句を比較してその変遷を追う必要があり、また同時代の他の戯曲や文芸作品における用法も精査すべきであるが、現時点ではその可能性を裏付ける証拠を見つけられていない。この点については後考を俟ちたい。

尚、本研究はJST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2123の助成を受けたものである。